

江戸時代、この地に豊かな文化の種をまいた

画家・呉春と池田

江戸時代に京都画壇で活躍した画家・呉春。

生涯の一時期を池田で暮らし、

町の人とも広く交遊した彼を中心に、

江戸時代の池田には豊かな文化が花開きました。

今月から、彼の足跡をたどる展覧会が

逸翁美術館で開催されるに先立ち、

画家・呉春について紹介します。

呉春
印



■栗柿図 呉春 絹本墨画 24.4×24.8cm 江戸時代 18～19世紀

表紙および特集(2～5ページ)に掲載している写真は、(公財)阪急文化財団提供です。



■観月人物図 呉春

絹本淡彩 102.0×32.7cm 江戸時代 18世紀



■寒山孤鹿図 呉春

絹本淡彩 102.0×32.7cm 江戸時代 18世紀



■寒林落日図 呉春

絹本着色 111.0×27.0cm 江戸時代 18世紀 池田市指定文化財

傷心を抱え移住した池田で町人に支えられ、活発に交遊

江戸時代、池田の文化に大きな影響を与えた人物に画家・呉春（1752―1811）がいます。呉春は、京都に生まれ、30歳の終わりから7年あまり池田に暮らしました。

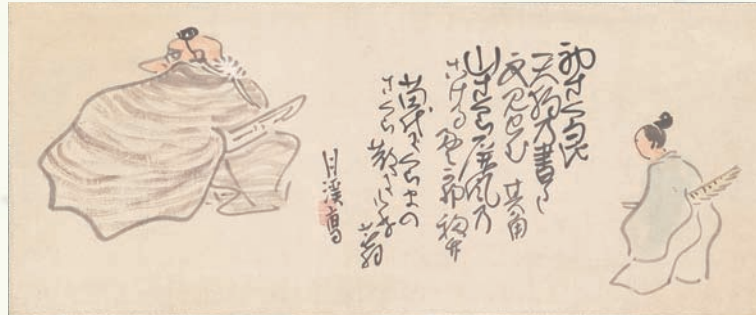
呉春という呼称は、画業に使用された号で、姓を松村、名を豊昌といい、俳諧では月溪とも名乗りました。はじめ京都で金座（小判類など金貨の製造についての監督機関）の役人を務めた呉春は、俳人・文人画家として知られる与謝蕪村（1716―1783）に師事し、本格的に画や俳諧を学び、才能を開花させていきました。

池田に移り住むきっかけは、天明元（1781）年、妻・はると父を続けて亡くす不幸に遭い、蕪村から環境を変えることを勧められたためであったといえます。呉服商で池田に店を構えていた蕪村の門人、川田田福を頼り、田福の家の隣の控屋に身を寄せました。さらに、翌年正月には、池田の古名「呉服の里」にちなみ姓を「呉」、池田で初めての正月（初春）を迎えたことから名を「春」と改め、剃髪して心機一転を図りました。

呉春は田福の庇護を受けて池田の人々との交遊を深めていったようです。

当時は画家として生計を立てることが難しかった呉春のために、池田の裕福な商人たちは有志で「掛物講」を組織しました。この会は、講のメンバーが出資し合い、当たりくじを引いた者が作品を入手する権利を得るという形式で、5年間に計10回開催されました。

俳諧においても、呉春は、池田の文人たちに蕪村



■牛若丸句画賛 呉春(月溪)
紙本淡彩 224.6×59.5cm 江戸時代 18~19世紀



■蕉葉雷神図 円山応挙／呉春
紙本墨画 131.5×43.5cm 江戸時代18~19世紀

**呉春の帰郷後も
影響を受けた弟子たちが活躍**

の高弟であった高井几薫(1741-1789)を紹介するなど、文化の中心を担いました。その結果、池田には田福のほかにも1人程度であった蕪村門下の俳人が滞在中に10人近くに増えていたともいわれます。

蹴鞠や謡曲など諸芸の会合も盛んに行われ、加えて、常々「食い物の解せぬ者は、なんにも上手にならぬ」と言っていた呉春は、酒造家の山川星府らと「一菜会」という食通の会合をも開催しました。

このように、呉春を中心として、江戸時代の池田における文化活動は隆盛を極めました。

一方で、天明6(1786)年ごろからは京都に戻るが増えていったといえます。この頃、当時京都で地位を確立していた写生派の画家・円山応挙(1733-1795)と出会い、呉春の画風は写実的な描法や柔らかい色調が加わった叙情的な表現へと変化していきました。

京都での活躍の場を広げていった呉春は、寛政元(1789)年5月、京都四条富小路(現京都市下京区)に居を構え、ついに池田の地を去ることとなりました。その後は、応挙没後、京都画壇の中心となり、幕末まで隆盛を誇った日本画の流派・四条派の礎を築いていきます。

呉春が去った後も、呉春の弟子たちは池田の文化における中心的な存在でした。その代表的な人物に葛野宜春齋や馬寅がいます。

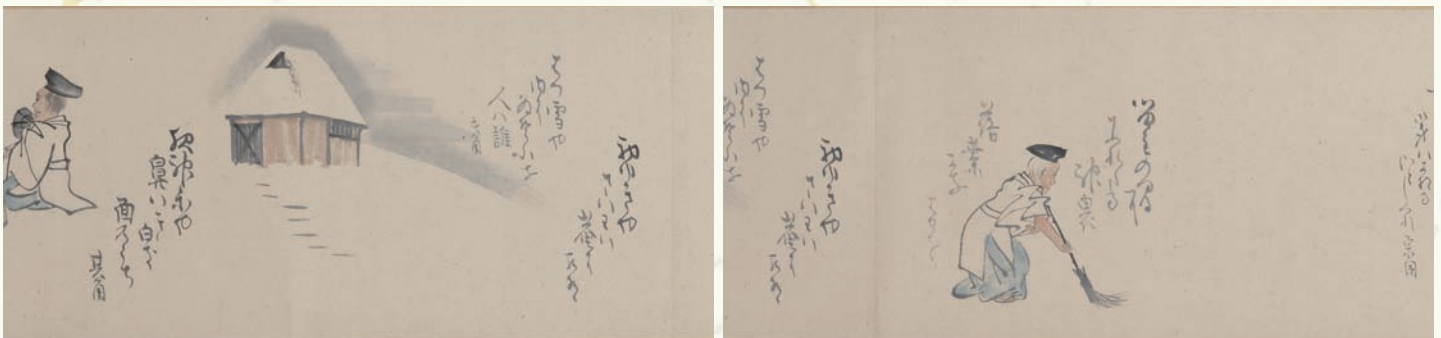
葛野宜春齋は、明和8(1771)年に西本町(現栄本町)の酒造家に生まれました。呉春に師事し、呉春の移住後は池田の文人たちが所蔵していた呉春



■十二か月京都風物句図巻(部分) 呉春 紙本淡彩 1巻 16.7×269.7cm 江戸時代 18世紀



■白梅図屏風 呉春 絹本墨画着色 六曲一双 各175.5×373.5cm 重要文化財



■年中(十二月)行事句画賛巻(部分) 呉春 紙本墨画淡彩 1巻 31.5×900.0cm 江戸時代 18~19世紀

2019展示Ⅳ

池田市市制施行80周年記念
画家「呉春」—池田で復活(リボン)!

本市の市制施行80周年を記念し、池田に所縁の深い画家「呉春」の作品を特集して陳列します。池田の地で復活し、さらに豊かに育まれた、呉春の画業の変遷をたどります。

時9月14日(土)~12月8日(日)。前期(9月14日~10月20日)・後期(10月26日~12月8日)で展示替えあり ※休館日:月曜日(祝日・振替休日の場合は翌日) **場**逸翁美術館 **¥**一般700円/大学・高校生・20人以上の団体・65歳以上500円/中・小学生以下無料

主な展示 寒林落日図、奥細道山刀伐切峠詞図、平家物語大原小鹿詞図、十二か月京都風物句図巻、蕉葉雷神図(円山応挙・呉春合作)、桜花游鯉図、白梅図屏風(重要文化財)など全70点程度

問逸翁美術館 ☎751・3865

や応挙らの絵画を手本にして、技術を習得していったようです。宜春齋の画に同じく酒造業を営む文人仲間が賛を書いた作品もあり、当時の池田に浸透していた文化的気風がうかがえます。

馬寅は、宜春齋より5歳ほど年下で呉服神社(池田市室町)の神官を務めました。いつから呉春に師事したかは不明ですが、呉春が京都に戻った後も、馬寅が京都へ出向いて教えを受けたと考えられています。書画会を主催するなど、池田文化の中心的な担い手として活躍しました。

呉春が池田に滞在したのは7年あまりですが、呉春の生涯における転換期にあたり、のちに四条派の祖となるための礎を築いた重要な時期であったといえるでしょう。

文責:歴史民俗資料館 ☎751・3019